

会 報

○第六六回学術大会

九月一五日(土)―一七日(月・祝)の三日間、立正大学において以下の日程で開催され、五二九名の参加者があった。

・九月一五日(土)

学会賞選考委員会

一一時三〇時―一三時

庶務委員会

一三時―一四時三〇分

国際委員会

一三時―一四時三〇分

情報化委員会

一三時―一四時三〇分

宗教文化士(仮称)検討委員会

一三時―一四時三〇分

開会式

一四時三〇分―一四時四〇分

公開シンポジウム

一四時四〇分―一七時四〇分

理事会

一八時―二〇時三〇分

IAHR残務委員会

二〇時三〇分―二二時

・九月一六日(日)

研究発表(個人)

九時―一二時四〇分

評議員選考委員会

一〇時―一一時三〇分

評議員会

一二時四〇分―一四時

研究発表(パネル)

一四時―一六時

会員総会

一六時二〇分―一七時五〇分

懇親会

一八時―二〇時

・九月一七日(月・祝)

研究発表(個人)

九時―一二時四〇分

『宗教研究』編集委員会

一二時四〇分―一三時三〇分

研究発表(個人)

一三時三〇分―一七時三五分

プログラム委員会

一四時―一五時三〇分

○日本宗教学会賞選考委員会

日 時 二〇〇七年九月一五日(土) 一一時三〇時―一三時

場 所 立正大学 五号館五二A教室

出席者 嶋田義仁(長)、関一敏、津城寛文、中村生雄、深澤

英隆、松村一男

議 事

審査の結果、冲永宜司氏とランジャナ・ムコパディヤ氏以下の業績を推薦することを決定した。

二〇〇七年度学会賞選考委員会報告

冲永宜司氏(帝京大学教授)の研究業績について

審査対象

『心の形而上学――ジェイムズ哲学とその可能性』(創文社、

二〇〇七年二月刊)

本書は、アメリカ合衆国の哲学者、ウィリアム・ジェイムズの思想を、現代の心の哲学および宗教哲学の文脈において解釈し、またジェイムズを通じて、一連の哲学上の根本問題に迫ろうとする研究である。ジェイムズは、すでに没後一世紀を経ながらも、今日なお最先端の哲学・思想との関連で活発な再解釈がなされている存在である。ところが『宗教経験の諸相』などが日本の宗教思想史に並々ならぬ影響を与えたのに対して、日

本においてはまとまったジェイムズ研究は決して多くない。その点でも、浩瀚な本書は重要な意味をもっている。

本書の成果として、まずジェイムズ研究について言えば、第一に、ジェイムズの経験論を、ジェイムズの同時代の心の哲学の議論の文脈において検討し、ジェイムズ固有の意識の「流れ」説がそれらの諸説の難点を克服するものとして生成する過程を入念に再構成している点が、評価される。さらに第二に、ジェイムズの所説を心の哲学として再解釈しつつ、現代の最先端の心の哲学をめぐる活発な論争状況とつきあわせ、ジェイムズの純粹経験論を自然主義的な存在論を超える実在と心性の理解モデルとして再把握するとともに、生の直接的充実を開示する思想として再評価した点に、大きな成果が見られる。

本書の更なる成果は、宗教哲学に関わるものである。ジェイムズの示唆する純粹経験論は、主客の分離を可能とする論理空間の「手前」にある実在という性質を帯びていた。著者は、この純粹経験論とジェイムズの宗教経験論とを理論的に結びつけるとともに、宗教経験のひとつの究極的ありかたと見なされるこの純粹経験の直中に立つ生の可能性と条件を、論理的考察によって能う限り明らかにしている。加えて著者は、ジェイムズが示唆する宗教経験の諸例、ことにトルストイのそれを取り上げ、上記の哲学的省察が宗教的生とどのようなかたちで相即するかを詳細に検討する。とりわけ、純粹経験に到る生がいかにニヒリズムの克服と結びつくかを、著者は執拗に論じる。そのうえで、著者は最後に純粹経験を、これと同様に主題化不可能な根源的実在と目される空をめぐるインド思想の展開とむすび

つけ、自我と概念枠を超脱して直接的かつ無分節な生に降り立つことの可能性と意味を詳述してゆく。このように、心の哲学に属する問題群を経て、またそれらに繰り返し立ち戻りながら、究極的実在と究極的生のあり方をめぐる思考可能性と思考不可能性へと進められる著者の思索は、一貫性ある大きな思想の流れとなっており、十分な説得力をもつと思われる。その叙述は明晰なものであり、一著作としての統一性と完成度は高いと言える。

もちろん本書にも、種々の問題点があることは確かである。

まず、明晰さを求めるあまり、繰り返しが目立つ部分が少なくない。また「純粹経験」論と仏教の「空」思想の関係づけについては、より以上の議論のひろがり欲しい。さらに、そもそも主題化そのものが原理的に不可能なものとされる経験領域を扱う本書の叙述そのものについての、反省的な説明が十分ではない。加えて、本書は「宗教経験」や「空の経験」などを本質主義的に前提とする語法をとっており、こうした概念の歴史性やイデオロギー的性格に関する近年の討議には一切ふれていない。また、もとより取り組んだ問題そのものが、アポリアにとどまらざるをえない問題であるため、本書には、積極的な最終的結論はない。もつとも著者は、ジェイムズと同様に、開かれた真理理解にたち、本書を通じて、心の形而上学をめぐる討議へと我々を誘っているのだと理解することができる。

以上のような問題点があるとはいえ、思考可能性の臨界点に属する問題に果敢に取り組んだ著者の意気込みと努力は、十分に評価されている。また本論は、近年盛んな議論の対象となつ

ているスピリチュアリティや内在的宗教性に関わる哲学的基礎論との性格ももっており、この点でも注目値する。

以上の理由から、本委員会は本書を、二〇〇七年度日本宗教学会賞を受賞するにふさわしい業績であると判断する。

ランジャナ・ムコパディヤヤ（名古屋市立大学准教授）の研究業績について

審査対象

『日本の社会参加仏教——法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理』（東信堂、二〇〇五年五月刊）

仏教はキリスト教に比べて社会参加の要素が希薄であると思われるが、近年、タイや欧米の仏教徒や仏教学者の間で、仏教の社会活動、環境問題、政治活動などが注目され、Engaged Buddhism (Socially Engaged Buddhism) という用語を用いた実践や研究が、活発になってきた。本書は、この状況を受けて、「社会参加仏教」という訳語を自ら提案し、従来看過されていた、日本仏教の社会参加という主題を設定し、設問に適合的な対象を選択して、入念な事例研究を行い、他方また、この新たなタームを軸に、理論面でも意欲的な取り組みをみせた好著である。

この用語が我が国で広く知られていない状況からして、当然ながら、本書のテーマ設定と調査・研究は斬新である。従来の仏教研究が、思想研究、歴史研究に重点があったのに対して、法音寺と立正佼成会という、現代の二つの日蓮系教団を対象に、宗教以外の領域での社会活動を、医療、福祉、ボランティア

ア、平和運動など、個別の分野に即して、具体的、実証的に明らかにしている。地方支部レベルの活動の調査、とくに個人信者レベルのインタビューやアンケート調査から得られたオリジナルの詳細な資料は、仏教研究の視野の拡大に貢献するばかりでなく、国内外の他の宗教や教団の社会参加との比較研究に耐えられる、高度の質・量をもっている。

理論的には、世俗化論以後の、ベラーやカサノヴァらの宗教の脱私事化、再公共化の議論を整理したうえで、その論争状況の中で自らの研究を位置づけ、一定の理論的貢献を行っている。ベラーの市民宗教論やカサノヴァらの公共宗教論が、社会全体を一つの宗教的理念によって統合するものとして考えられているのに対して、社会参加宗教は多元的公共圏の構築に寄与するものとして、区別される。社会参加仏教、一般化して社会活動をする宗教の活動は、「国家、社会、大衆、国際」という四つの次元やパターンをもつという分析視点、社会参加は個人の信仰が公的に作用しているという指摘、また市民意識が未成熟な社会における宗教者・宗教団体の活動は市民社会論では捉えきれないという指摘など、いずれも、さまざまな分野で活発な論争がつづく公的領域論に関連しており、挑戦的である。研究の要約や研究史の概説に近い部分もあるが、理論的考察は、内外の宗教研究が交差する、宗教と社会の関わりという大きなテーマを見据えつつ展開されており、今後の発展性を蔵している。

このような評価すべき点の一方、本書には問題点もないわけではない。

まず、理論面での中心的な枠組みとして、社会参加に「国家、社会、大衆、国際」の四つの次元／パターンが設定されているが、多少の概念的混乱が見られ、有効性に疑問が残る。また、本書で選択された教団を「日本仏教」の事例とする根拠について、必ずしも自覚的に反省されていない。当該教団は、仏教であるという自己理解の一方で、新宗教としての特徴も含んでいるからである。とくに、社会参加仏教は多元的公共圏の構築に貢献すると主張するに際しては、ヨーロッパ的文脈で生まれた公共圏論についての議論を、より深く踏まえた上で、日本的文脈に即して再検討する必要があるだろう。

細かい点に立ち入れば、社会参加仏教がただの社会活動ではなく、宗教的な教えの社会的な実践であるという動機について、教義に即した当事者の自己理解だけでなく、自己維持のための戦略といった側面も、さらに考慮する必要がある。社会参加仏教のどこが近代特有の現象なのかという問題も、考察の余地がある。また著者のいう「国家化」の次元では宗教の政治参加が問題となり、じっさい同じく日蓮系の創価学会はその代表例であるが、そうした関心に応える記述が充分ではない。

しかしながらこうした問題点も、本書の価値を大きく損なうものではない。それらはむしろ、斬新な視点からの研究が一段落した時点で、さらに新たな視野が開け、今後の諸課題が明らかにになったものに他ならず、著者自身これらを今後の研究課題として明確に自覚しているからである。

著者は非漢字圏のインド出身の研究者であるが、短期間で日本語に習熟し、当該教団の実態を分析・考察した努力と能力

は、称賛に値する。また準備されている本書の英語版が広く世界的に読まれ、共通の関心に応えることで、日本の宗教研究の国際化に貢献することも期待される。本書の事例研究を出発点に、今後著者が、比較の範囲を世界規模の社会参加宗教へと広げること、当然期待される。

これらの達成度と今後の発展性を総合して、本委員会は本書を、二〇〇七年度日本宗教学会賞にふさわしい業績と判断する。

○庶務委員会

日時 二〇〇七年九月一五日(土) 一三時—一四時三〇分

場所 立正大学 五号館五二B教室

出席者 池上良正、岩田文昭、櫻井治男(長)、ポール・スワ

ンソン、関一敏、山中弘、渡辺和子、(オブザーバ

ー) 星野英紀

議 事

一、紹介者がいない入会希望者について

普通会员の入会審査は規程通り「現会員二名(内、一名は教員)の紹介」が必要であるとの原則を守りつつ、紹介者がいない場合は、これまでの慣例を踏襲し、学術論文数点の提出を求め、理事会の前に庶務委員会が精査し、その結果を理事会で報告し、理事会が入会承認の最終決定を行う。

二、プログラム記載の所属について

七月の理事会時点での所属について承認、決定を行い、所属を空欄とした場合も従来通り、その旨を本人に連絡しない。

なお、大会実行委員会より、今大会のプログラムの追加承認について経緯と処理結果が報告され、了承した。

三、学会賞の推薦について

学会賞の推薦依頼にあたり、選考委員会の選考方針等を公表すべきかについては継続審議とする。

四、一二月発行の会員名簿について

發送先、団体の記載事項について確認がなされた。

五、財政基盤の充実問題

会費未納者の報告が行われ、会費納入の向上に努めることが話し合われた。また、今年度の予算案の確認を行った。

○国際委員会

日時 二〇〇七年九月一五日(土) 一三時—一四時三〇分

場所 立正大学 五号館五二C教室

出席者 池澤優(長)、奥山倫明、川橋範子、嶋田義仁、田島

忠篤、深澤英隆、吉原和男

議事

一、IAHRの女性研究者ネットワークについて

IAHRのロザリンド・ハケット会長とモニ・ジョイ理事による「女性研究者ネットワーク」が完成した。このネットワークの目的は、世界中の宗教研究に従事する女性研究者が相互に接触する場を提供することで、IAHRの様々な会議への参加を促進する点にある。参加希望者はホームページ(<http://mailman.ucalgary.ca:80/mailman/listinfo/wsn>)このフォームに記入し送付すること。また、IAHRの公

式ウェブサイト(<http://www.iahr.dk/wsn/>)からもアクセスできる。

二、東アジアの宗教研究者による国際シンポジウムについて
継続審議となっていた国際シンポジウム開催については、国際委員会が単独でシンポジウムの案を策定することはできないという結論に達した。

○情報化委員会

日時 二〇〇七年九月一五日(土) 一三時—一四時三〇分

場所 立正大学 五号館五二D教室

出席者 小川順敬、櫻井義秀、中野毅(長)、袁輪頤量、弓山

達也、吉永進一

議事

一、今年度の予算案について

『宗教研究』データベース関連五万円・HP更新運営費三万円・機材費四〇万円、計八〇万円とする。

二、HPについて

年間アクセス数は二四三七〇件。HP運営作業部会により、以下のリニューアルが行われた。全体的なデザイン調整(文字サイズ等)／スタイルシートの統合・簡略化／『宗教研究』論文情報検索データベース(約一万五千件)の設置／アクセス解析スクリプトの設置／サイト内全文検索の設置と調整／サイト内記述の修正(コンテンツへのリンクの諸修正等)

三、HPの有効活用について

・開催校の大会HPを大会終了後も積極的に活用し、プログラ

報 告

ムやパネルの紹介、写真、大会の総括などを掲載していただき、学会HPからリンクして参照できるように働きかける。

・パネル発表のネット上での継続討議は、希望者の責任において掲示板などを設置してもらい、学会HPからリンクを張ることが確認された。

・総会で会員に呼び掛け、過去三年間の科研報告書のデジタルデータの提供を受けて、アップする。

・『宗教研究』欧文要旨を最新号から三二三号(三二二号までは入力済)まで遡り掲載し、そのために紙媒体の欧文要旨のデジタル化(スキヤニング+OCR)を行う。

・宗教文化士(仮称)の設置をにらみ、研究者・シラバス・講義ノート・資料等の紹介を、HP内で行うことが検討され、継続議題となった。

四、会員の登録メールアドレス宛に、会費納入、次回学術大会、HP更新などの情報提供を行うメールマガジン配信の提案があり、継続議題となった。

○宗教文化士(仮称)検討委員会

日時 二〇〇七年九月一日(土)一三時—一四時三〇分

場所 立正大学 五号館五二E教室

出席者 井上順孝(長)、大村英昭、澤井義次、塩尻和子、土屋博

議 事

一、今大会中の理事会・評議員会・総会で承認を受ける趣旨文の文言を若干修正した。「宗教文化士」の名称は仮称とし、

最終的には資格認定委員会で決定する。

二、理事会等での配布予定資料、補足説明の内容に関する検討

・大村委員より、社会調査士の場合は社会学教育委員会に始まり設立に一〇年を要したこと、いくつかの大学で個別に認定を行った経緯もあつたことが紹介された。

・井上委員より、カリキュラムの共同研究の必要性、社会の潜在的需要などについて意見が述べられ、早い時期に試み着手して、問題が判明すれば途中で軌道修正を行うという形で進めたいとの提案がなされた。

・宗派教育と宗教文化士は両立すること、「宗教と社会」学会の他にも連携する学会を増やす方針であること、社会的認知を得ることが重要であるとの認識が確認された。

・科研費を申請して、検討委員会での議論を具体化していくことの必要性が合意された。

○理事会

日時 二〇〇七年九月一日(土)一八時—二〇時三〇分

場所 立正大学 三号館三三四教室

出席者 芦名定道、池上良正、池澤優、石井研士、市川裕、

井上順孝、大村英昭、小田淑子、加藤智見、鎌田

繁、氣多雅子、古賀和則、小坂国継、櫻井治男、佐

藤憲昭、澤井義次、塩尻和子、島蘭進、嶋田義仁、

下田正弘、白山芳太郎、鈴木岩弓、鈴木正崇、ポー

ル・スワンソン、高田信良、高橋渉、田島忠篤、田

島照久、田中雅一、月本昭男、對馬路人、津城寛

文、土屋博、鶴岡賀雄、中野毅、中村生雄、中村廣治郎、長谷部八朗、花岡永子、深澤英隆、カール・ベッカー、星野英紀、間瀬啓允、三友健容、望月哲也、山中弘、吉原和男、鷺見定信、渡辺和子、渡辺学

議 事

一、評議員選考委員選挙の結果

田島照久選挙管理委員長より選挙結果が報告された。続いて星野会長から評議員選考委員会の審議状況と役員選考の方針について説明がなされた。

二、会計報告

山中庶務委員より、二〇〇六年度の決算報告と二〇〇七年度の予算案が提出され、承認された。(別記参照)

三、日本宗教学会賞

嶋田委員長より審査結果が報告され、報告通りに決定した。

四、諸委員会からの報告と提案

(1) 宗教文化士(仮称)検討委員会

資格認定の趣旨、全体構想の説明の後、資格の内容、具体化する上での疑問点などについて質疑応答が行われた。実験的に始めてみて見えてくる問題もあるので、慎重に進めていただくことで、次のステップに進むことが了承された。

(2) 庶務委員会

普通会员として入会する際の規定を確認し、紹介者がいない場合は、庶務委員会で入会資格があるかを調べ、理事会で諮ることとする。

(3) 国際委員会

- ・世界的な女性宗教研究者のためのネットワークが完成した。
- ・IAHRのHPをご覧いただきたい。
- ・東アジアの宗教研究者を招聘してシンポジウムを開催する件は、委員会として具体的な立案を行わないが、大学等の機関が開催する国際会議に共催する形で学会のシンポジウムを開くことは可能ではないかとの提案があった。

(4) 情報化委員会

学会HPで『宗教研究』の論文検索ができるので、ぜひ活用していただきたい。HPの有効活用として、学術大会のコンテンツの充実、パネル発表の継続議論のサイトへのリンク、科研費報告書の閲覧サイトの設置、『宗教研究』欧文要旨のデジタル化、メールマガジン発行などを検討している。

五、委員会の新委員

・編集委員

逝去された島岩氏、任期終了の藤原聖子氏に代わって、鶴岡賀雄氏、渡辺学氏に委員を委嘱したことが会長より報告され、承認された。

・プログラム委員

任期終了は三友健容氏(開催校)。重任の岩田文昭、関一敏、鶴岡賀雄、林淳、星野会長の五氏に加えて、山中弘氏(開催校)に委嘱した旨が報告され、承認された。

六、次年度の学術大会

山中常務理事より、筑波大学で、二〇〇八年九月一三日―一五日の日程で開催予定であることが報告された。

七、日本学術会議関連

- ・日本宗教研究諸学会連合設立集会を一二月に開催する。
- ・東洋学（アジア研究）連絡協議会の担当委員を、中村廣治郎常務理事に代わって、池澤優理事にお願いしたことが報告され、承認された。

八、新入会員

別記七名の入会が承認された。

九、名誉会員

鈴木康治、高崎直道、中島秀夫、前田惠學、松本皓一、幸日出男の六氏に名誉会員になっていただくことが決定された。

一〇、次年度の理事会の日程

二〇〇八年四月一二日（土） 大正大学

七月 五日（土） 大正大学

九月 一三日（土） 筑波大学（学術大会中）

〇IAHR残務委員会

日時 二〇〇七年九月一五日（土）二〇時三〇分—二二時

場所 立正大学 五号館五—A教室

出席者 池澤優、市川裕、氣多雅子、島蘭進、月本昭男、鶴岡賀雄、星野英紀、山中弘、渡辺学

議 事

鶴岡委員より、二〇〇五年に開催されたIAHR東京大会の英語書物 (*Religion and Society: An Agenda for the 21st Century*, edited by Gerrie ter Haar & Yoshio Tsuruoka, Brill) が 'International Studies in Religion and Society

のシリーズの一冊として刊行されたことが報告され、会員への周知方法他について検討した。

〇評議員選考委員会

日時 二〇〇七年九月一六日（日）一〇時—一一時三〇分

場所 立正大学 五号館五—A教室

出席者 池上良正、井上順孝、氣多雅子、佐藤憲昭、島蘭進、末木文美士、鈴木岩弓、月本昭男、鶴岡賀雄、星野英紀、山中弘、鷺見定信

議 事

新評議員の選考（第二回）を行った。

〇評議員会

日時 二〇〇七年九月一六日（日）一二時四〇分—一四時

場所 立正大学 三号館三四—A教室

出席者 八四名

議 事

一、諸報告

- ・評議員選考委員選挙の結果
- ・会計報告

・日本宗教学会賞

・次年度の学術大会

二、宗教文化士（仮称）検討委員会より、資格の趣旨他が説明された後、質疑応答が行われた。

○総会

日時 二〇〇七年九月一六日(土) 一六時二〇分—一七時五〇分

場所 立正大学 三号館三四一教室

出席者 大会参加会員数五二九名、定足数一七七名、出席者数(委任状提出者を含む) 三二三名、よって総会は成立した。

議事

一、開会

二、議長に高橋堯英氏を選出

三、評議員選考委員選挙の結果について

四、新評議員の選任(別記参照)

五、新評議員による理事、監事の互選と選任(別記参照)

場所 立正大学 三号館三四一教室

出席者 新評議員 五六名

六、新理事による常務理事の互選と選任(別記参照)

場所 立正大学 三号館三四一教室

出席者 新理事 三二名

七、日本宗教学会賞について

八、会計報告

九、諸委員会報告

・宗教文化士(仮称) 検討委員会

・国際委員会

・情報化委員会

一〇、委員の交代

一一、日本学術会議関連事項

一二、次年度の学術大会について

一三、名誉会員について

一四、閉会

○常務理事会

日時 二〇〇七年九月一六日(日) 一六時四〇分—一五〇分

場所 立正大学 三号館三四一教室

出席者 池上良正、氣多雅子、佐藤憲昭、島蘭進、嶋田義

仁、ポール・スワンソン、高田信良、田島照久、月

本昭男、鶴岡賀雄、中村生雄、星野英紀、三友健

容、山中弘

議事

二〇〇八年度会長選挙について

(1)日程

三月一二日(水) 普通会员、維持会員に選挙公示発送

五月二七日(火) 第一次投票有権者資格締切

五月三〇日(金) 第一次投票有権者資格認定

六月 二日(月) 第一次投票用紙発送

六月三〇日(月) 第一次投票締切

第二次投票有権者資格締切

七月 五日(土) 選挙管理委員会(第一次投票開票、第二次投票有権者資格認定)

七月二三日(水) 第二次投票用紙発送

八月二七日(水) 第二次投票締切

八月三〇日(土) 選挙管理委員会(第二次投票開票)

(2) 選挙管理委員長

互選により、中村生雄氏を選出した。

○『宗教研究』編集委員会

日時 二〇〇七年九月一七日(月・祝)一二時四〇分—一三時三〇分

場所 立正大学 五号館五二C教室

出席者 浅見洋、樫尾直樹、白川琢磨、ポール・スワンソン、鶴岡賀雄、土井健司、長谷部八朗、藤原聖子、細田あや子、丸井浩、山崎亮、山中弘(長)、渡辺雅子、渡辺学、(オブザーバー) 星野英紀

議事

- ・委員の交代。
- ・三五六号(来年六月刊行予定)以降の書評本および評者候補を選定した。
- ・二〇〇九年度の特集号について検討した。

○プログラム委員会

日時 二〇〇七年九月一七日(月・祝)一四時—一五時三〇分

場所 立正大学 五号館五二A教室

出席者 岩田文昭、関一敏、鶴岡賀雄、星野英紀、山中弘

議事 今大会で生じた問題点、今大会の発表取消者名と取消理由が

報告された。

○日本宗教学会役員名簿(二〇〇七年一二月現在)

会長	星野 英紀			
〈常務理事〉	安蘇谷正彦	池上 良正	井上 順孝	
宇都宮輝夫	大村 英昭	小田 淑子	川村 邦光	
氣多 雅子	櫻井 治男	佐藤 憲昭	澤井 義次	
島蘭 進	嶋田 義仁	末本文美士	鈴木 岩弓	
鈴木 正崇	SWANSON, Paul L.	関 一敏	高田 信良	
田島 照久	月本 昭男	土屋 博	鶴岡 賀雄	
中村 生雄	林 淳	藤田 正勝	三友 健容	
山中 弘				
〈理事〉	芦名 定道	安達 義弘	池澤 優	
池見 澄隆	石井 研士	市川 裕	岩田 文昭	
大越 愛子	大貫 隆	GARDNER, Richard	加藤 智見	
金井 新二	鎌田 繁	鎌田 東二	河東 仁	

岡村 圭真	岡村 康夫	小川 圭治	小川 順敬	保呂 篤彦	前田 毅	間瀬 啓允	町田 宗鳳
岡田 正彦	岡田真美子	岡野 治子	岡部 和雄	北條 賢三	保坂 幸博	細田あや子	堀内みどり
庵谷 行亨	大野 栄人	大峯 顯	小笠原 眞	藤田 宏達	藤田 雅延	藤原 聖子	古田 暁
越前 喜六	大垣 豊隆	大久保雅行	大島 末男	菱木 政晴	平野 孝國	平林 孝裕	藤井 正雄
岩井 洋	植島 啓司	薄井 篤子	瓜生津隆真	芳賀 学	橋本 武人	長谷 正當	華園 聰磨
磯岡 哲也	伊藤 唯真	稲垣不二磨	今西 順吉	生井 智紹	奈良 弘元	西村浩太郎	根井 浄
池田 士郎	井桁 碧	石川耕一郎	石田 慶和	中里 巧	中島 秀憲	中田 考	中村廣治郎
安中 尚史	飯田 剛史	家塚 高志	池田 昭	寺川 俊昭	寺戸 淳子	土井 健司	東長 靖
荒井 献	荒井 芳廣	荒木美智雄	安藤 泰至	田村 晃祐	垂谷 茂弘	塚本 啓祥	出村みや子
△評議員△	赤池 憲昭	浅見 洋	洗 建	田中 良昭	谷 寿美	谷口 茂	田丸 徳善
△監 事△	奈良 康明	前田 專學	渡辺 学	田賀 龍彦	高島 淳	高橋 壯	竹原 創一
鷺見 定信	渡辺 和子	渡辺 雅子	吉原 和男	鈴木 康之	関根 清三	藺田 坦	藺田 稔
八木久美子	山崎 亮	山本 春樹	諸岡道比古	新保 哲	SWYNGEDOUW, Jan	杉村 靖彦	鈴木 範久
宮崎賢太郎	村上 興匡	望月 哲也	松村 一男	坂井 信生	佐々木宏幹	柴田 史子	白川 琢磨
星川 啓慈	細谷 昌志	松丸 壽雄	保坂 俊司	小松 和彦	齋藤 昭俊	斎藤 明	酒井サヤカ
藤井 健志	藤本 淨彦	BECKER, Carl	保坂 俊司	倉澤 行洋	黒川 知文	小池 淳一	小林 圓照
HEISIG, James W.	長谷部八朗	花岡 永子	深澤 英隆	倉澤 行洋	木村 敏明	久保田圭伍	久保田 浩
中牧 弘允	西山 茂	丹羽 泉	野村 文子	木村 武史	橘堂 正弘	木場 明志	木村 勝彦
寺園 喜基	永井 政之	中野 毅	中別府温和	木塚 隆志	KISALA, Robert	北川 前肇	北野 裕通
棚次 正和	對馬 路人	津城 寛文	土田 友章	菅野 博史	川橋 範子	川又 志朗	神田より子
竹村 牧男	田島 忠篤	立川 武蔵	田中 雅一	河野 訓	川崎 信定	川島 堅二	河波 昌
竹沢尚一郎	竹下 政孝	武田 道生	武田 龍精	金児 曉嗣	葛西 實	桎尾 直樹	門脇 健
下田 正弘	白山芳太郎	芹川 博通	高橋 涉	笠井 正弘	加賀谷 寛	掛川 富康	笠井 惠二
阪本 是丸	櫻井 義秀	佐野 賢治	塩尻 和子	何 燕生	奥山 倫明	尾崎 和彦	小野 基
木村 清孝	孝本 貢	古賀 和則	小坂 国繼	小熊 誠	尾崎 和彦	小野 基	

会員訃報

日本宗教学会評議員(元理事)、龍谷大学名誉教授、岡亮二先生は、二〇〇七年二月一六日逝去されました。享年七三歳。
日本宗教学会名誉会員、駒澤大学名誉教授、櫻井徳太郎先生は二〇〇七年八月二七日逝去されました。享年九〇歳。
謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

松尾 剛次	松岡 秀明	松長 有慶	松本 滋
松山 康國	MULLINS, Mark R.	丸井 浩	丸野 稔
水垣 渉	水谷 幸正	蓑輪 顕量	宮家 準
三宅 守常	宮田 元	宮本要太郎	村上 真完
村野 宣男	森 哲郎	矢内 義顕	安酸 敏眞
矢野 秀武	山我 哲雄	山形 孝夫	山崎 裕子
山崎 美恵	山下 秀智	山ノ井大治	弓山 達也
吉田喜久子	吉津 宜英	吉永 進一	渡邊 隆生
渡邊 寶陽			

執筆者紹介 (執筆順)

伊達 聖伸	日本学術振興会特別研究員
落合 仁司	同志社大学教授
オリオン・クラウタウ	東北大学大学院
大田 俊寛	埼玉大学非常勤講師
中村みどり	京都大学大学院博士後期課程単位取得退学
青木 健	東京大学大学院博士課程修了
池上 良正	駒澤大学教授
川端 亮	大阪大学教授
葛西 賢太	宗教情報センター研究員
櫻井 義秀	北海道大学教授
竹村 牧男	東洋大学教授
伊原木大祐	日本学術振興会特別研究員
桑原 直己	筑波大学准教授
田中 裕	上智大学教授
森岡 正芳	神戸大学教授
田中 雅一	京都大学教授
高橋 原	東京大学助教
榊 和良	北海道武蔵女子短期大学非常勤講師
土屋 博	北海学園大学教授